

中華人民共和国湖南省における方言番組 をめぐる政策について

A Study on Dialect Program and Its Policy in Hunan Province,
the People's Republic of China

小 田 格

要 旨

本稿は、中華人民共和国湖南省の漢語方言を使用したラジオ・テレビ番組（方言番組）をめぐる政策を考察するものである。そこで、同省における関連政策の枠組みを確認し、従前の方言番組の放送状況を振り返り、これらを通じて得られた情報を総合的に検討することとした。その結果、導出した結論は、次の通りである。すなわち、同省では、1990年代中盤に規制通知が発出されたにもかかわらず、その後テレビで方言番組が放送されるようになった。この背景には、テレビ市場における競争環境の形成という事情があり、当局はテレビ局の新たな試みを理解・支持した。さらに、同省では、方言番組の放送が続けられたが、それが急激に増加・拡大することはなく、再び独自規制が課されるような状況にはならなかった。他方において、全国的な規制通知の運用状況を確認する限り、同省の方言番組開設に係る行政許可の審査や事後的な監督・検査は至って緩やかなものと推察される。

キーワード

湖南省、漢語方言、標準中国語（普通話）、言語政策、方言番組

I. 序 論

筆者は、これまで小田（2016a；2016b；2017a；2017b；2018a；2018c）により、中華人民共和国¹⁾（以下「中国」という）の漢語方言²⁾（以下「方言」という）を使用したラジオ・テレビ番組（以下「方言番組」という）をめぐる政策を対象とし、東南部沿海地域の4省1直轄市の事例を考察してきた。また、小田（2018b；2019）では、当該政策の変遷を辿り、2000年代に生じた変容のメカニズムの解明に取り組んだ。

本稿は、上記のような研究の成果を踏まえたうえで、湖南省の方言番組をめぐる政策を考察するものである。同省は、方言番組ブームを牽引した「越策越開心（モアトーク・モアハッピー）」（湖南電視台）が放送されていた行政区であるが、こうした番組が誕生した環境を探っていくということは、特定地域の事例研究に留まらず、政策変容の要因を一層追究するに際しても必要不可欠な作業と考えられる。

湖南省の放送に関する先行研究は膨大に存在しており、そのなかには方言番組を取り扱ったものも少なくない³⁾。しかし、管見の限り、方言番組をめぐる政策という角度から、同省の事例を検討した論考は認められない。そこで、以下では、湖南省における関連政策の枠組みを確認し、従前の方言番組の放送状況を振り返ったうえで、総合的な考察を行うこととしたい。

結論を先取りするならば、1990年代後半に湖南省は、放送領域での方言の使用を許容する方向へと舵を切り、その後は方言番組が一定の範囲に収まっていたこともあって、独自の規制が課されるようなことはなかった。また、全国レベルの規制通知の運用状況を踏まえると、同省の方言番組に関する審査やチェックは至って緩やかなものと見られる。

II. 関係法令等

本章では、湖南省の方言番組に関する法令⁴⁾及び関係文書（以下「法令等」という）を確認する。なお、全国レベルの法令等に関しては、小田（2018b；2019）を参照されたい。

1. 過去の関係文書

(1) 「農村における有線放送局の建設に関する指示」

「農村における有線放送局の建設に関する指示」⁵⁾は、1956年4月3日に中国共産党湖南省委員会により発出された文書であり、前文及び7項からなる。同文書は、タイトルの通り農村地域における小規模放送局の開設に関する諸事項を取りまとめたものであるが、この第6項（第2段落）は、次の通り、使用言語に関する内容である（〔 〕は筆者によるもの）。

少数民族の居住地区の放送局は、当該民族の言語を用いて放送を実施すべきであり、もし当地において少数民族言語と漢語のいずれもが通用するのであれば、両方の言語を用いて放送すべきである。漢民族の居住地区では、当地で通用する言語を用いて放送するものとするが、必ず標準中国語〔以下、原語の「普通話」という〕を用いた番組を設け、その普及を図るようにするものとする。

この文面からすると、漢民族の居住エリアでは、方言により放送を行うことも可能と解される。なお、このように方言による放送を許容しつつ、普通話の番組を設け、もってその普及政策に貢献すべきとする内容は、中央のラジオ事業局⁶⁾から同日付で発出された「ラジオ事業局による普通話の普及に関する指示」⁷⁾と平仄の合ったものである。

(2) 「ラジオ・映画・テレビにおける言語文字の正確な使用に関する規定」
「ラジオ・映画・テレビにおける言語文字の正確な使用に関する規定」⁸⁾
〔96〕湘広宣字第45号)は、1996年10月14日に湖南省ラジオ・テレビ庁⁹⁾ から関係機関に送付された規範性文書であり、前文及び6項からなる。前文では、次の通り、制定の趣旨を説明している。

言語及び文字は、最も重要な情報媒体であり、民族及び国家の象徴及び統一・団結の絆である。言語文明は、精神文明の重要な内容である。ラジオ・映画・テレビにおいて標準的かつ規範的な言語文字を使用することは、実際の宣伝効果と関係があるだけでなく、社会における言語文字の文明から全ての精神文明に至るまで重大な影響を有している。ラジオ・映画・テレビの言語文字の規範化を強化し、社会に対して積極的な模範提示機能を発揮するために、以下の規定を制定する。

全6項のうち、方言の使用に関する規定は、第1～3項であり、次のような内容である（下線は筆者によるもの）。

第1項 全省各級のラジオ局及びテレビ局並びに有線ラジオ・テレビ局は、普通話を使用して放送しなければならない、当該地域の方言により放送してはならない。アナウンサー及び番組司会者の普通話の水準は、省級及び市級のラジオ局及びテレビ局の場合は1級甲等とし、県級の最低ラインは1級乙等に達していなければならないとともに、等級証の携帯勤務を段階的に実現していくものとする。アナウンサー及び番組司会者は、純然たる普通話を使用すべきであり、香港及び台湾のアクセントを模倣してはならず、番組のアナウンス

又は司会の際に、OK や Bye Bye といった外国語の単語を混用してはならない。一部の外国語は、普通話のアナウンスの習慣に照らし、例えば、MTV の場合には「音楽テレビ」等のようにいわずにしなければならない。

第2項 ラジオ局及びテレビ局並びに有線ラジオ・テレビ局のディレクター・記者は、番組の司会を務め、インタビューを録音・録画し、又は番組に出演する場合、審査及び選考を経なければならず、司会を務めるときは、通常、アナウンサー及び司会者と同等の普通話の水準に達しているようにしなければならない。 ラジオ局及びテレビ局がゲストを招聘して番組の司会を行う場合であっても、当該ゲストは一定の普通話の水準を備えていなければならない、方言を使用して司会進行してはならない。 ラジオ局及びテレビ局は、インタビュー中に、取材対象者に対して可能な限り普通話話すように要求しなければならない。

第3項 映画及びテレビドラマ（地方劇を除く）は、普通話を使用しなければならない、方言を濫用してはならない。 劇中の指導者は、通常、普通話を使用しなければならない、方言の使用は厳格に抑制しなければならない。 ラジオ局及びテレビ局並びに有線ラジオ・テレビ放送局は、方言による漫才、コント、ラジオドラマその他の文芸番組の放送を抑制しなければならない。

上記の内容は、同年9月11～13日に開催された「ラジオ・映画・テレビの言語事業に関する全国会議」¹⁰⁾での決定事項¹¹⁾と対応している。ただし、省の関係部門が全国会議の要録等を下級機関に転送することは一般的であるが、本件は湖南省ラジオ・テレビ庁が独自の規範性文書として取りまとめて発出したのであって、注目に値する事例である。後述する通り、こう

した措置が講じられた要因としては、1995年に湖南人民広播電台による方言ラジオドラマの成功が指摘される。

2. 現行の関係法令等

(1) 湖南省「中華人民共和国国家通用言語文字法」施行弁法

湖南省「中華人民共和国国家通用言語文字法」施行弁法¹²⁾(湖南省第10期人民代表大会常務委員会公告第56号)は、湖南省における中華人民共和国国家通用言語文字法¹³⁾(2000年主席令第37号)の施行規則に該当する法令である。同弁法は、2006年3月31日に制定され、同年5月1日より施行されている。

同弁法全25条のうち、方言番組に係る条文は第9条であり、次のような規定である。

第9条 ラジオ・テレビのアナウンス、番組の司会、インタビュー等及び映画・テレビ番組の制作並びに演劇の上演は、普通話を使用しなければならない。映画・テレビ番組及び演劇の字幕その他表示される文字は、規範漢字を使用しなければならない。

2 伝統劇、映画・テレビ番組等の芸術様式において必要が認められる場合は、方言を使用することができる。放送の言語として方言を使用する必要が確かに認められる場合には、省のラジオ・テレビ部門の許可を経なければならない。

この内容は、中華人民共和国国家通用言語文字法の関係規定(第12条、第14条及び第16条)と大差なく、同省独自の方言番組に係る規制又は特例措置は認められない。

(2) 関係文書

上記の通り、湖南省の法令は、方言番組の開設許可に係る条件等を事細かに規定していない。また、同省では、浙江省及び江蘇省で発出されたような方言番組の開設許可に係る規範性文書も確認できない¹⁴⁾。

他方、地方政府が公表している文書からは、方言番組の開設許可に係る条件を窺い知ることができる。例えば、「常德市人民政府の事業部門責任一覧」¹⁵⁾を確認すると、「常德市文化・体育・ラジオ・テレビ・ニュース・出版局責任一覧」の「三 事中・事後の監督制度」第15項が「ラジオ・テレビでの方言を使用した放送に対する監督・検査」となっており、表1のような内容となっている。

表1の「内容」及び「プロセス」に認められる①方言番組の総数、②ニュース総合チャンネルにおける方言番組の有無、③少年・児童チャンネルにおける方言ニュース番組の有無、④時事・政治、総合及び重要なテーマに関するニュース番組での方言の使用という4点は、方言番組の開設条件と捉えられる。また、この①～④に関しては、浙江省の「方言番組管理の更なる強化に関する通知」¹⁶⁾（浙広局発〔2007〕第138号）（第4項第2号、同第3号及び同第5号）との共通点が指摘され、他の行政区を参考にして設定されたもののようにも見受けられる。

なお、中華人民共和国国家通用言語文字法及び関係法令等の遵守状況をチェックするための仕組みとしては、「都市言語文字事業評価」¹⁷⁾も存在しているが、湖南省言語文字工作委员会により策定された「都市言語文字事業評価の実施に関する通知」¹⁸⁾を確認する限り、各放送局につき一部の番組及び広告のサンプリング検査を実施するのみである。

表1 常德市の方言番組に対する監督・検査の内容

区分	具体的な内容
1 対象	方言により放送する番組を設けている市級及び県級のラジオ・テレビの放送実施機関
2 内容	ラジオ・テレビの放送実施機関が設けている方言番組の総数、ニュース総合チャンネルにおいて方言番組を設けているか否か、少年・児童チャンネルにおいて方言ニュース番組を設けているか否か、時事・政治、総合及び重要なテーマに関するニュース番組を方言により放送しているか否か。
3 方法	(1) 書面検査 (2) モニタリングによる検証 (3) 通報による検証
4 手続	(1) 方言を使用した放送の手続が十全であるか否かについての書面審査 (2) 聴取・視聴を通じた方言番組が規範に適合しているか否かについての審査 (3) 通報・告発を受理した場合、技術的手段を通じた方言番組の総数及び範囲についてのモニタリング
5 プロセス	(1) 各チャンネルの番組表を書面により審査し、方言番組の放送総量、番組のジャンル及び放送されているチャンネルの点検を行う。 (2) モニタリング要員を組織し、各チャンネルの方言番組に対して日常的な聴取・視聴による監督を行う。 (3) ラジオ・テレビの放送実施機関が設けている方言番組の総数が基準を超過している事例、ニュース総合チャンネルにおいて方言番組を設けている事例、少年・児童チャンネルにおいて方言ニュース番組を設けている事例、時事・政治、総合及び重要なテーマに関するニュース番組を方言により放送している事例が認められた場合、直ちに当該機関に対して規定違反の方言番組の放送停止を命じるとともに、改善後の状況に対して追跡調査を実施する。
6 処理	規定に違反している方言番組が認められた場合、放送実施機関に対して直ちに当該番組を放送停止とするよう命じる。

出所) 常德市人民政府ウェブサイト「常德市人民政府工作部門責任清單」(常德市人民政府工作部門責任清單(2015版・下冊)(440-441)) (<https://www.changde.gov.cn/Upload/History/ChildSite/web1/site/attach/0/bda494f3414e474ea6dfac43881f207d.doc>) (最終閲覧2021年2月21日)に基づき筆者作成

Ⅲ. 方言番組の放送状況

本章では、湖南省における方言番組の放送状況を振り返ることとした。
い。

1. ラジオ放送

湖南省では、1949年11月7日に長沙人民広播電台が設立され、1950年11月1日に湖南人民広播電台に改称された。設立当初、同台では基本的に普通話により放送が実施されていたが、一部の番組では長沙話が使用されており、1950年の第一（ニュース）チャンネルでは、9時に「第一次長沙話省市新聞（第1回長沙話による省と市のニュース）」が、21時30分に「第二次長沙話省市新聞（第2回長沙話による省と市のニュース）」が、それぞれ配されていた（『湖南省志 第二十卷 広播電視志』：39：563-564）。

また、湖南人民広播電台の農村向け番組に関しては、一部を普通話、一部を長沙話で放送することもあった。もっとも、1962年には番組内容の改善を目的として農民に対する調査等が行われた結果、湖南省は方言が多いことから、大多数がラジオ放送は規範的な普通話が望ましいと認識していることが確かめられたとされる（『湖南省志 第二十卷 広播電視志』：57-59）。

さらに、湖南人民広播電台の方言使用に関しては、次のような情報も確認できる（〔 〕は筆者によるもの）。

1950年代末から1966年にかけて、湖南電台は幾度か長沙話によるアナウンスを試行した。最初は長沙話の発音が比較的標準的なディレクターが〔アナウンサーを〕兼任し、1966年2月には湖南省戯曲学校から専任の長沙話アナウンサー2名が来た。その後、数度のリスナー調査を経て、結果が芳しくなかったことから、最終的に長沙話によるア

ナウンスは停止となった。(『湖南省志 第二十卷 広播電視志』:111)

上記の農村向け番組に関しても、1966年には毎日18時30分「対農村広播(長沙話)(農村向けラジオ(長沙話))」が配されていたことが認められるものの、その後の足取りはつかめない(『湖南省志 第二十卷 広播電視志』:575)。

一方、1950年以降、省内各地にラジオ局が設置されていったが、方言の使用状況には地域差が存在していた。具体的には、1950年代、西南官話使用エリアである常德市では、最初から普通話によるラジオ放送が実施されていたが、湘語使用エリアである衡陽市では、当初全員が衡陽話のアナウンサーであり、1955年になって北京出身の女性小学校教諭がアナウンサーとして採用されて以降、普通話での放送も行われるようになった(『常德地区志 広播電視志』:36;『衡陽市広播電視志(1949-2009)』:94)。

しかし、こうした不均衡な状態が一貫して続いてきた訳ではなく、その後ラジオの使用言語は各地で徐々に普通話に切り替えられていったと見られ、例えば、常寧県(現・衡陽市常寧市)では1970年に常寧話から普通話に変更されたと記録されている(『衡陽市広播電視志(1949-2009)』:118-119)。

さらに、1987年4月1日には、国家言語文字工作委员会¹⁹⁾及びラジオ・映画・テレビ部²⁰⁾から「ラジオ、映画及びテレビにおける言語文字の正確な使用に関する若干の規定」²¹⁾(国語字〔1987〕第10号)が発出され、放送及び映画での方言の使用を減少・抑制するとともに、普通話の使用を段階的に増加させていくという国の基本方針が示された。こうした事情もあって、『中国広播電視年鑑』(1988~1990年版)に掲載された「国内向けラジオ放送での使用言語の名称」²²⁾に湖南省の方言は1つも見当たらない(『中国広播電視年鑑』1988年版:572;1989年版:492;1990年版:533)。同省で1990年代前半に入ってから方言によりラジオ放送が実施されていたのは、主

に普通話の理解が困難なりスナーを擁する農村地域に限られていたようである（『中国広播電視年鑑』1992-1993年版：452；『湖南広播電視年鑑』1991-1992年版：238；1993年版：257）。

ところが、1990年代中盤に大きな変化が見られる。1995年に湖南人民広播電台文芸チャンネルは、長沙話を使ったラジオドラマ「人生百態（人生いろいろ）」を放送した。同作は、社会問題を題材とした1話完結のストーリー（全50話）であり、「湖南ラジオ賞」²³⁾や「1995年度湖南省精神文明建設『5分野1作品プロジェクト』優秀番組賞」²⁴⁾を受賞するなど優れた成績を取めた（『湖南広播電視年鑑』1996年版：242；『湖湘文化辞典（五）』：273）。

しかし、かかる状況が危惧・懸念されたのか、既述の通り、1996年10月には湖南省ラジオ・テレビ庁から規制通知が発出され、その後方言によるラジオドラマが続出するような状況にはならなかった。湖南省でラジオの方言番組の情報が再び確認されるようになるのは、後述するテレビの方言番組が定着して以降のことである²⁵⁾。

2. テレビ放送

湖南省では、1960年10月1日に長沙電視台（湖南電視台の前身）が試験放送をスタートし、一応テレビの時代を迎えるが、間もなく1962年6月2日には中央の方針により放送停止となってしまふ。その後は、1969年5月に湖南電視台の設置が決まり、翌1970年9月29日に開局した。当初同台では、北京電視台（中央電視台の前身）の番組の中継が中心であったが、1971年からは一部番組制作も行われるようになった（『湖南省志 第二十卷 広播電視志』：137-139）。

湖南電視台で本格的に番組の制作・放送が行われるようになるのは、1979～1980年頃のことである。その頃は既に普通話による放送が浸透していたこともあり、全国の多くの地域と同様、同台にも方言番組と思しきタ

イトルは見当たらない。もっとも、当時の番組を確認すると「戯劇与欣賞（演劇と鑑賞）」のような伝統芸能を取り扱ったものが存在しており、湖南省等で演じられる「花鼓戲」も収録されていたことからすれば、方言がテレビのスピーカーから流れる機会もあったと見られる。また、1984年のテレビドラマ「郷里妹子（郷里の娘）」でも方言が使用されたこととされる（『湖南省志 第二十卷 廣播電視志』：141-169）。

しかし、湖南電視台の方言番組が拡大することはなく、これは1980年代に省内各地に設置された市級テレビ局も同様の傾向であった。1980年代後半から1990年代中盤にかけての『湖南廣播電視年鑑』を精査してもテレビの方言番組は確認できず、湖南省のテレビにおける方言の使用は、伝統劇や一部の漫才・コントなどの限られた範囲に収まっていたと判断される（『湖南省志 第二十卷 廣播電視志』：206-216；『湖南廣播電視年鑑』1986～1997年版）。

しかるに、1990年代後半に入ると、湖南省のテレビで方言番組が散見されるようになる。1997年、湖南經濟電視台²⁶⁾は、漫才コンビ奇志・大兵と契約し、「幸運1997（ラッキー1997）」の放送を始めたが、二人の掛け合いは普通話と長沙話で進められるものであった²⁷⁾（鄒当榮 2000：19；羅昕如等2019：176-215）。

翌1998年7月、湖南經濟電視台は「故事酒吧（ストーリー・バー）」を開始した。同作は、週末の番組改革の一環として投入された方言によるバラエティであり、日曜日の14時から放送され、日中の時間帯に放送されるバラエティ番組の全国最高視聴率16%を獲得するなど大ヒットとなった。また、方言によるコント等を中心に構成される番組であったが、「楊五六笑伝（楊五六の爆笑伝）」、「德哥外伝（徳アニキ外伝）」及び「晶晶秘伝（晶晶ちゃん秘伝）」はシリーズ化され、ビデオCDも発売されることとなった²⁸⁾（鄒当榮 2000；『湖南廣播電視年鑑』1999年版：276）。

続く1999年、湖南経済電視台は、新たな試みとして一世を風靡した時代劇「還珠格格（還珠姫～プリンセスのつくりかた～）」を長沙話に吹き替えて放送した。同作の方言版は、清代の宮廷を舞台としたドラマに長沙話を配したこともあって賛否両論が巻き起こったが、その分多くの視聴者の関心を集めたようである（『長沙晩報』1999年10月23日）。

そして、2002年5月には、湖南電視台經濟チャンネルで「越策越開心」がスタートする。同作は、基本的に普通話により進行しつつ、司会やゲストが必要に応じて方言を使用するバラエティ番組であるが、2004年8月に開催された「中国国際ラジオ・映画・テレビ博覧会」²⁹⁾において「全国優秀テレビ番組百選」³⁰⁾として選出され、2000年代前半の方言番組ブームを牽引する存在となった（『湖南廣播電視年鑑』2003年版：292；侯・陳・劉 2006：108）。

さらに、2004年4月からは、湖南電視台經濟チャンネルで「一家老小向前衝（一家みんなで突き進もう）」が放送される。同作は、「情景劇」と呼ばれるシチュエーションコメディであり³¹⁾、2006年の長沙市での平均視聴率が8.2%、最高視聴率が17.5%に達するなど省内で好評を得たほか、湖北省をはじめとした各地のテレビ局にも販売され、各地の方言が配されて放送された（『湖南廣播電視年鑑』2005年版：359；阿雲 2007：23-25）。

1990年代後半以降の湖南省における主なテレビの方言番組を取りまとめたものが表2である。

表2 1990年代後半以降の湖南省のテレビ局（省級・市級）による主な方言番組

等級	テレビ局		開始時期	番組名称	ジャンル
	名称	チャンネル			
省級	湖南經濟電視台	総合	1997年	幸運1997	バラエティ
	湖南經濟電視台	総合	1998年	幸運1998	バラエティ
	湖南經濟電視台	総合	1998年	故事酒吧	バラエティ／情景劇

	湖南經濟電視台	総合	1999年	幸運1999	バラエティ
	湖南經濟電視台	総合	1999年	還珠格格 (方言版)	ドラマ (吹替作品)
	湖南電視台	経済	2002年	越策越開心	バラエティ
	湖南電視台	娯楽	2002年	一千零一夜	ドラマ (情景劇)
	湖南電視台	経済	2003年	一家老小向前衝	ドラマ (情景劇)
	湖南電視台	映画・テレビ	2003年	紅胖子哈哈笑	バラエティ
	湖南電視台	映画・テレビ	2003年	紅胖子哈哈 SHOW	バラエティ
	湖南電視台	都市	2004年	故事会	ドラマ (欄目劇)
	湖南電視台	映画・テレビ	2005年	生活口味蝦	ドラマ (情景劇)
	湖南電視台	娯楽	2005年	婆媳一本經	ドラマ (情景劇)
	湖南電視台	娯楽	2005年	欲望都市	ドラマ (欄目劇)
	湖南電視台	瀟湘映画	2006年	武林外伝 (湖南方言版)	ドラマ (吹替作品)
	湖南電視台	経済	2014年	逗吧, 逗把街	ドラマ (情景劇)
	湖南電視台	公共	2015年	浔龍河	ドラマ (欄目劇)
	湖南電視台	公共	2021年	君風笑伝	ドラマ (情景劇)
市級	長沙電視台	8 ch (CCTV)	2000年	一笑治百病	ドラマ (情景劇)
	長沙電視台	公共	2005年	我来講新聞 / 我来說新聞	ニュース
	長沙電視台	政法	2009年	愛上十点半	トーク
	常德電視台	ニュース	1999年	開心你我他	バラエティ
	常德電視台	公共	2009年	公共視点	ニュース
	常德電視台	公共	2009年	幾德颯癮	ドラマ (情景劇)
	郴州電視台	経済生活	2004年	新生活 (「郴州市家人」)	生活情報 (ドラマ (情景劇))
	衡陽電視台	娯楽	2002年	娛樂胖胖	ドラマ (情景劇)
	衡陽電視台	都市	2006年	龍胡子講新聞	ニュース
	衡陽電視台	娯楽	2010年	娛樂双響炮	バラエティ
	衡陽電視台	娯楽	2010年	有嘛咯広嘛咯	トーク
	衡陽電視台	都市	2011年	猫和老鼠	アニメ
	衡陽電視台	都市	2012年	拐角巷七号	ドラマ (情景劇)
	衡陽電視台	都市	2013年	小叮当「鉄人兵団」	アニメ
	衡陽電視台	都市	2013年	雁城故事	ドラマ (欄目劇)
	邵陽電視台	政法民生	2013年	港句老実話	ニュース
	湘潭電視台	ニュース	2007年	茄坨利坨講新聞	ニュース
	湘潭電視台	ニュース	2007年	湘潭往事	ニュース

中華人民共和国湖南省における方言番組をめぐる政策について

湘潭電視台	公共	2007年	遠親近隣一家人	ドラマ（情景劇）
湘潭電視台	公共	2013年	茄坨来了 / 茄坨来囉	ニュース
益陽電視台	経済	2007年	民星開口笑	バラエティ
益陽電視台	郷村	2009年	洞庭風	生活情報
益陽電視台	ニュース総合	2019年	万事和為貴	ドラマ（情景劇）
永州電視台	ニュース総合	2007年	曉了顯火	ドラマ（欄目劇）
永州電視台	都市	2009年以前	今朝講什嘻	ニュース
岳陽電視台	公共	2005年	大日子小日子	ドラマ（情景劇）
岳陽電視台	不明	2005年	岳陽故事	トーク
岳陽電視台	晴彩	2015年	舌戰街河口全魚樓	ドラマ（情景劇）
株洲電視台	ハッピー	2006年	小区故事多	ドラマ（情景劇）

出所) 葛・鄧 2020; 蔣祖發 2009; 李勝彬 2007; 魏颯滌 2017; 武漢大学中国語情監測与研究中心 2013a; 湘萱 2000; 雍旭宇 2008; 章・許 2015; 周紫燕 2007: 38; 鄒当榮 2000; 『常德年鑑』2009年版: 424; 『常德市廣播電視志(1988~2010)』: 148; 『衡陽年鑑』2011年版: 282; 『湖南廣播電視年鑑』1999年版: 276; 2001年版: 335-338; 2003年版: 292; 294; 2004年版: 264; 2005年版: 247-248; 312; 2006年版: 9-10; 12; 173-174; 308; 310; 2007年版: 17; 293; 2008年版: 93; 106; 109; 341; 2009-2010年版: 210; 356-358; 2011年版: 196; 2012年版: 267-268; 2014年版: 53; 146; 2015年版: 240; 『湖南年鑑』2001年版: 324; 『湖湘文化辭典(五)』: 230; 284; 313; 『岳陽年鑑』2006年版: 331; 『長沙晚報』1999年10月23日; 2015年1月8日; 『華西都市報』2006年3月22日; 『三湘都市報』2021年2月7日; 『益陽日報』2019年9月2日; 『岳陽晚報』2015年7月20日; 『瀟湘晨報』2006年3月17日; 2020年8月27日; 湘潭市廣播電視台ウェブサイト(湘潭傳媒網)「張軍」(<http://www.hnxtv.com/tv/2014-03/17/cms20799article.shtml>) (最終閲覧2021年2月21日)に基づき筆者作成

表2からは、次のような特徴・傾向が指摘できる。

第1に、省級局による方言番組の放送が多いことが挙げられる。浙江省及び江蘇省では、省級局では原則として方言番組を設けないよう定められており、方言による放送の担い手は市級局が中心である(小田 2016b; 2017a)。こうした状況に対して、湖南省では、むしろ省級局が全国的な知名度を誇る「越策越開心」等を放送することにより、方言番組の放送を牽引してきた。

第2に、市級局では、1990年代後半から方言番組が一部認められるもの

の、その放送が一般化するのには2000年代中盤である。これは全国的な方言番組ブーム以降のことであり、湖南省では必ずしも省級局が市級局を直接刺激する形で方言使用が増加・拡散した訳ではないことが読み取れる。また、2000年代中盤以降に関しては、確かに2005年に新番組が比較的目的立つが、地域的な広がりや数量の伸びは総じて穏やかだったと捉えられる。

第3に、番組のジャンルとしては、ドラマ（情景劇、欄目劇³²）及び吹替作品）やバラエティが多い。浙江省及び江蘇省では、2004年以降「阿六頭説新聞（阿六頭がニュースを語る）」のような方言によるニュースが人気を博し、各地に急拡大していったが（小田 2016b：2017a）、このような傾向は湖南省には見られない。もちろん、同省でも方言ニュースは存在していたが、各地で相次いで放送が始められ、その後定着するという流れにはなっていなかった。

なお、実際に湖南省の方言番組を視聴してみると、そのスタイルにも指摘すべき点が認められる。すなわち、方言と普通話の混用がそれである。既述の通り、湖南省の「越策越開心」などは、メインの進行は普通話であり、そこに適宜方言が挿入されていく。こうした傾向は、普通話と方言の比率が異なるものの、湖南電視台及び湖南經濟電視台の一般的なバラエティ番組、例えば「快樂大本營（ハッピーキャンプ）」、「天天向上（Day Day Up）」、「娜可不一樣（劉娜と馬可のゲストルーム）」、「娛樂大歌庁（エンタメミュージックホール）」、「你是湖南人不咯（湖南人ですか）」、「周六家長會（土曜日の父母會）」等にも認められる。

このようなスタイルは、台湾のバラエティ番組——基本的に華語で進行しつつ、時折台湾語や客家語なども用いながら展開する——と相通じるところがある。実際、湖南電視台は、1980年代から台湾のテレビ業界と交流しており、また1990年代には湖南經濟電視台が台湾において「超級星期天（スーパーサンデー）」や「紅白勝利（紅白バトル）」、「全能綜芸通（マルチ

バラエティショー)」といったバラエティ番組の収録・編集の現地視察等を行ったり、台湾からプロデューサーを招聘して番組制作に取り組んだりしたことも確かめられる（何共淮 1992：226；劉珍瑜 1999：32；唐滌非 1999：42）。これらの事実からすれば、湖南省のテレビ局が台湾のバラエティ番組における言語使用を参考にしたと見ても、あながち不合理ではないだろう。

さらに、こうしたスタイルを確固たるものとしたのは、「越策越開心」をはじめとした各番組で司会を務めてきた汪涵である。彼は1990年代の「幸運」シリーズの頃からテレビに出演し、湖南経済電視台のエンターテイメント路線において方言を効果的に活用してきたと評される（李曉婷 2005；李中恵 2005）。

IV. 考 察

1. テレビ市場における競争環境の形成と方言番組の導入

湖南省では1996年に放送言語に関する規制通知が発出された。同通知は、普通話での放送を義務づけ、方言の使用を抑制するよう求めたものであり、それゆえ1995年に湖南人民廣播電台の「人生百態」が成功したにもかかわらず、類似の番組が続出するようなことにはならなかった。当然ながら、放送局としては、通常、このような状況下において方言番組を新たに設けることは躊躇うはずである。

しかるに、湖南経済電視台は1998年に方言を売りにした「故事酒吧」をスタートさせた。その前年には「幸運1997」が成功していたが、そこでの方言使用が容認されたこともあって、更に一段踏み込んだ試みが始められたものと推察される。それでは、同台は、なぜあえて方言を使用する方向に舵を切ったのだろうか。そこには、テレビ市場の競争環境形成という当時の事情が窺われる。

湖南省には、元々省級のテレビ局として湖南電視台が存在していたが、1994年に湖南省ラジオ・テレビ庁は、省内のテレビ市場を發展させるためには競争が必要と考え、上海東方電視台の経験を参考にして、新たに湖南經濟電視台を設置することを決定した。翌1995年12月18日に放送を開始した同台は、「改革と競争」という使命を担い、既成概念に囚われず組織体制や番組制作の改革に取り組むことにより、その後短期間で急激に収益を上げていった（歐陽常林 1999：19；湘萱 2000：44-45；新聞天地編輯部 2001：14；湯集安 2011：17-18）。

湖南經濟電視台に関しては、既述の通り、台湾のテレビ業界との交流があり、バラエティ番組の制作には少なからず影響を受けていたものと見られる。また、山田（2006）からは、湖南省のテレビ局が香港のスタイル・表現方法に倣って番組を制作していたことも分かる。さらに、同台は上海東方電視台をモデルにして設けられたとされるが、しからば上海市のテレビ事情にも精通していたはずである。湖南經濟電視台の関係者がこれら地域の先行事例を参考にしながら番組の企画を練っていくなかで——たとえそれがタブーだとしても——方言を使ってみたいと思うようになるのは自然な流れであろう。

以上に加えて、湖南省の地理的な環境も方言番組を放送する心理的ハードルを下げた可能性がある。例えば、同省の南には方言放送特区というべき広東省が存在しており、省級局でも方言番組が盛んに放送されていた（小田 2018a）。また、同省北西部が隣接する重慶市では、1980年代から方言によるドラマが多数制作されてきた（武漢大学中国語情監測与研究中心 2013b）。こうした近隣行政区の状況を見渡してみただうえで、湖南經濟電視台の関係者が若干の方言番組を放送するくらいは許容されるだろうと推測・判断することは十分に想定される。

いずれにせよ、「故事酒吧」が放送される運びとなったのは、当局の

理解・支持が得られたからにはかならない。湖南経済電視台の創設には、湖南省ラジオ・テレビ庁の魏文彬庁長が深くかかわっていたが（任・周 2002：38）、同氏は「テレビを『宣伝のための道具』から『大衆の消費・娯楽のための道具』に変身させた立役者」であり、「湖南省の指導者もこうした魏氏の改革を支持した」とされる（山田 2006：66）。このようにテレビ業界の改革を支持する土壌があり、規範的な言語の使用よりもエンターテインメント性を優先する番組制作が許容され、方言番組が世に送り出されることとなったのである。鄒当栄（2000）は、「故事酒吧」に関する一連の事象を叙述しているが、方言の使用に対する規制に言及がないばかりか、湖南省ラジオ・テレビ庁の関係者等の同番組に対する肯定的なコメント³³⁾を掲載している。

2. 方言番組の数量及び当局による規制

筆者は、小田（2018c：243）において、1990年代中盤の上海市における上海語ドラマをめぐる状況と、2000年代中盤の全国的な方言番組ブームとの間に「① テレビ市場の商業化に伴い、競争環境が生み出され、② テレビ局が差別化を図るために本来『禁じ手』であるはずの方言の使用に踏み切り、③ その狙いが功を奏し、高視聴率を記録したことによって、④ これに続けとばかりに方言番組が増加することとなったが、⑤ かかる状況を許容しがたい当局が規制に乗り出してきた」という共通の構図を見出した。これと1990年代後半以降の湖南省の方言番組をめぐる状況とを比較すると、①～③は基本的に同様の動きと捉えられるが、④及び⑤は様相が異なっている。

まず、方言番組の数量に関しては、湖南経済電視台及び湖南電視台は方言番組の制作・放送を継続し、相応の人気を獲得してきたが、しかしだからといってその数を急増させるような措置は講じてこなかった。また、前

章でも確認した通り、市級局が省級局を真似して方言番組を放送するようになり、それが省内各地に次々と広がっていくような現象も生じなかった。小田（2016b）で取り扱った浙江省の事例では、当局が方言番組の勢いをコントロールすることが困難な状況さえ見受けられたが、湖南省の場合は、テレビ局側の節度をわきまえた振舞いにより、極端な状態には至らなかったといえるだろう。

つぎに、当局による規制に関しては、上記の通り、湖南省ラジオ・テレビ庁は、湖南経済テレビ台による方言番組の放送を許容していたものと見られる。また、そもそも1996年の規制通知が既に一応存在しており、いわばその「運用」の下で方言番組が放送され、しかも一定の範囲内に収まっていたことから、別段新たな取締りに乗り出す必要もなかった。

もちろん、その後、湖南省の方言番組がまったくお咎めなしだったという訳ではない。2000年代中盤以降に広電総局³⁴⁾が発出・転送した「中国のラジオ・テレビのアナウンサー及び司会者の職業道徳に係る準則」³⁵⁾（2004年11月23日広電総局）、「中国のラジオ・テレビのアナウンサー及び司会者の自主規約」³⁶⁾（広発編字〔2005〕第554号）及び「ラジオ・テレビ番組の規範的な言語使用による普通話の普及に関する通知」³⁷⁾（広発〔2013〕第96号）は、「越策越開心」や「快樂大本营」、「天天向上」などを念頭に置いた内容と解され、湖南省の番組はむしろ度々槍玉に挙げられてきたようにすら感じられる。とはいえ、小田（2019）で指摘した通り、広電総局には方言番組を本気で壊滅させる意図はなかったように見られ、だからこそ中途半端な通知を用いて何度も繰り返し注意喚起を図ってきたものとも解される。

他方、山田（2006：66）は「CCTVや北京テレビのように首都に本拠地を置くメディアは、当局の目が厳しいので思い切った改革はしにくいが、湖南省は北京から遠く離れている“メリット”がある」と述べ、湖南省は

メディアに対する当局の監視体制が相対的に緩いことを指摘している。山田（2006）は、具体的にどういったレベルで緩さが見られるのかまでは触れていないが、以下の通り、方言番組に関する事例は存在している。

2004年10月13日、広電総局は「大陸外から輸入されたラジオ・テレビ番組の吹替版放送の管理に関する通知」³⁸⁾（広発編字〔2004〕第1188号）を発出した。同通知は、大陸外から輸入されたラジオ・テレビ番組の方言吹替を一律禁止し、該当する番組の放送をすみやかに停止するよう命じるとともに、行政機関に対して全面的な検査及び整理を指示した。2000年代の方言番組に関する規制のうち、同通知は比較的厳格に適用されたものと解され、当時全国的に流行していた「猫和老鼠（トムとジェリー）」の方言吹替版はテレビから姿を消していった。同通知は、2010年の広電総局による法令等の整理の際にも廃止されず、その後も有効のままである³⁹⁾。

しかしながら、湖南省にあっては、2011年12月に衡陽電視台が「猫和老鼠」の方言吹替版を開始し、少なくとも2013年5月まで放送を続けていた。また、同台では、2013年5月に「小叮当『鉄人兵団』（ドラえもん のび太と鉄人兵団）」の方言吹替版も制作された。そして、これらの情報は、いずれも『湖南広播電視年鑑』に堂々と掲載されている（『湖南広播電視年鑑』2012年版：267-268；2014年版：146）。

もとより、湖南省でも方言番組の放送には当局の許可が必要だが、全国レベルの通知に抵触していたとしても——その確認作業を実施していないのか、あるいは独自の判断基準により容認しているのかは定かでないが——審査を通過するということである⁴⁰⁾。また、同省では放送中の方言番組の監督・検査も実施されているが、大陸外から輸入されたラジオ・テレビ番組の方言吹替版はチェック項目に入っておらず、ゆえに海外アニメ作品の方言吹替版は放送停止命令の対象になることもない。

V. 結 論

本稿の結論は、次の通りである。

- ① 湖南省では、1990年代後半に湖南経済電視台が「故事酒吧」をスタートさせ、方言番組の時代が幕を開けた。1990年代中盤には規制通知が発出されたものの、テレビ市場における競争環境の形成という事情もあり、当局は同番組の新たな試みを許容した。
- ② 同省では、その後も方言番組が放送されたが、急激な数量の増加や市級局への拡大といった状況は発生せず、ゆえに独自規制が再度課されることもなかった。また、2000年代中盤以降、広電総局より規制通知が発出されたが、同省の方言番組は続けられた。
- ③ 他方、2000年代中盤に広電総局から禁止された大陸外からの輸入番組の方言吹替版が2010年代になって市級局によって放送された事例などを踏まえると、同省の方言番組開設に係る行政許可の審査や事後的な監督・検査は至って緩やかなものと推察される。

湖南経済電視台による方言番組の成功は、絶妙なタイミングとバランスの賜物だったように思われる。1990年代後半の湖南省で「故事酒吧」が始められたのは、放送領域での言語使用に関する注意喚起がなされてから数年後のことであり、ソフト化されるほどの人気を博しつつも、それが過度に加熱することはなく、当局の取締りによる打撃を受けることもなかった。さらに、その後も方言番組は続けられ、徐々に独自のノウハウやスタイルが構築されていき、2002年の「越策越開心」に結実していく。こうした流れが実現した背後には、同省の革新的で自由闊達な気質や地理的な環境といった要因があり、台湾をはじめとした各地のテレビ業界からの示唆・影響も少なくなかったことであろう。

一方、テレビ番組での方言使用を許容した湖南省ラジオ・テレビ庁の判

断は、その後の全国的な方言番組ブームへと続く道筋において、1つのターニングポイントだったといっても過言ではない。従前、方言番組は、法令により明確に禁止されている訳ではないが、関係文書の趣旨に鑑みれば適当でないと認識され、されど一部では放送されているというグレーゾーンであった。中央の言語政策部門の意向を汲めば、方言番組は取り締まるべき対象であり、現に1990年代中盤の上海市では当局により上海語のドラマが放送中止に追い込まれていった(小田 2018c)。しかし、繰り返されるが、法令で禁止されてはいないのであって、理屈の上では地方当局の決断次第で放送することも可能なはずである。そして、湖南省では、1998年頃にこの「決断」が下され、放送領域で方言を使用する方向へと歩んでいった。広東省や福建省のような特別行政区(旧植民地)及び台湾との結びつきという「特殊な状況」が特段認められない地域の都市部であっても一定の範囲内であれば方言番組を放送しても差支えないという法令の運用は、2000年代の政策変容を経て全国的に定着したが(小田 2018b)、湖南省は一足早く1990年代後半にその先陣を切ったのである。

注

- 1) 本稿では、中華人民共和国の法令等にいう「境内」(大陸)を「中国」の範囲とする。
- 2) 本稿では、中国の法令等でも使われる「方言」という呼称を用いる。なお、湖南省における方言の分布状況は複雑であり、話者が最多の湘語を筆頭に、西南官話や贛語、客家語などが使用されているエリアも存在する。複数の方言が使用されている行政区に関しては、文書の記載がいずれを指しているのか判別できない場合もあるが、本稿では差し当たり「地名+話(例:長沙話)」と記載するに留め、その特定は今後の課題としたい。
- 3) 例えば、中国知網(<https://cnki.net/>)において論文等のテーマを検索すると、「湖南 AND 电视(テレビ)」で9,924件、「湖南 AND 方言節目(方言番組)」で58件、「越策越開心」で41件の結果が示される(最終閲覧2021年2月21日)。

- 4) 本稿にいう法令は、中華人民共和国憲法及び中華人民共和國立法法（主席令第31号）第2条に規定される文書を指す。なお、法令のタイトルにはカギ括弧を付さない。
- 5) 原語：「中共湖南省委關於建立農村有線廣播站的指示」（1956年4月3日）（『湖南省志 第二十卷 廣播電視志』：505-507）。
- 6) 原語：廣播事業局。
- 7) 原語：「廣播事業局關於推廣普通話的指示」（1956年4月3日）（中国文字改革委員会1964：71-73）。
- 8) 原語：「關於印發『廣播電影電視正確使用語言文字的規定』的通知」。
- 9) 原語：湖南省廣播電視庁。
- 10) 原語：「全国廣播影視語言工作會議」。
- 11) 「關於転發全国廣播影視語言工作會議紀要的通知」（広発編字〔1996〕第663号）。
- 12) 原語：湖南省實施「中華人民共和國国家通用語言文字法」弁法。
- 13) 原語：中華人民共和國国家通用語言文字法。
- 14) 浙江省及び江蘇省の事例に関しては、小田（2016b；2017a）を参照のこと。
- 15) 常德市人民政府ウェブサイト「常德市人民政府工作部門責任清單」（常德市人民政府工作部門責任清單（2015版・下冊））（<https://www.changde.gov.cn/Upload/History/ChildSite/web1/site/attach/0/bda494f3414e474ea6dfac43881f207d.doc>）（最終閲覧2021年2月21日）。
- 16) 原語：「關於進一步加強方言類節目管理的通知」。
- 17) 原語：城市語言文字工作評估。なお、同制度に関しては、小田（2017c）を参照のこと。
- 18) 原語：「關於開展城市語言文字工作評估的通知」（2003年5月8日）（湖南省基礎教育改革与發展研究組・湖南省語委普通話培訓測試中心2009：46-50）。
- 19) 原語：国家語言文字工作委員會。
- 20) 原語：廣播電影電視部。
- 21) 原語：「關於廣播、電影、電視正確使用語言文字的若干規定」。
- 22) 原語：「対国内廣播使用語言名称」。
- 23) 原語：「湖南廣播賞」。
- 24) 原語：「1995年度湖南省精神文明建設“五個一工程”優秀節目賞」。
- 25) 具体的には、2003年7月に湖南人民廣播電台で「快嘴陳辣利（おしゃべり陳辣利）」の放送が開始されて以降、常德人民廣播電台「方言与笑話（方言と笑い話）」（2005年）、邵陽人民廣播電台「莎陀陀講新聞（莎陀陀がニュー

- スを話すよ)」（2010年）及び「男人四十跑出租（男四十タクシードライバー）」（2011年）、岳陽人民廣播電台「芳欣脫口秀（芳欣のトークショー）」（2016年）等、各地で方言番組が散見されるようになっていく（『湖南廣播電視年鑑』2004年版：269；2012年版：127；2017年版：222；『常德市廣播電視志（1988～2010）』：98；『湖湘文化辭典（五）』：297；『邵陽城市報』2020年8月14日）。
- 26) 同台は、1995年に当初独立して設置されたが、その後2000年に放送局の再編・改組が行われ、湖南ラジオ・映画・テレビ集団（原語：湖南廣播影視集団）傘下の湖南電視台の1チャンネルとなった。湖南電視台に属した後も「湖南經濟電視台」及び「湖南經視」の名称は使用されてきたが、本稿では2000年以降は「湖南電視台（經濟チャンネル）」として取り扱うこととする。
- 27) 筆者が各種動画サイトで断片的な映像を確認する限り、「幸運1997」の前身である「幸運3721（ラッキー3×7=21）」でも一部方言を使用していたようである。
- 28) 1999年2月8日に長沙市の阿波羅商業広場にて「楊五六笑伝」のVCD発売イベント及びサイン会が行われ、数万人の参加者があったとされる。当日の写真を確認すると、巨大な横断幕やステージが用意されており、多くの人だかりができていたことが確かめられる。また、同様のイベントは、その後衡陽市、郴州市、株洲市、湘潭市等でも実施されたようである（鄒当榮2000：316-322；368）。
- 29) 原語：「中国国際廣播影視博覧会」。
- 30) 原語：「全国百佳欄目」。
- 31) 開始当初は、広東電視台珠江チャンネルの情景劇「外来媳婦本地郎（余所から来た妻と地元出身の夫）」の脚本をアレンジして撮影された（『湖南廣播電視年鑑』2005年版：359）。
- 32) 主として実話の再現ドラマやそれに類する1話から長くても数話程度のドラマのことを指す。
- 33) 具体的には、湖南省ラジオ・テレビ庁の副庁長、元副庁長及び総編集室副主任や、中国共産党湖南省委員会宣伝部副部長のコメントを掲載している（鄒当榮2000：300-301）。
- 34) 現在中国では、國務院直属の国家ラジオ・テレビ総局（原語：国家廣播電視総局）が放送関係事業を所管している。また、2000年代に関しては、1998年3月に設置された国家ラジオ・映画・テレビ総局（原語：国家廣播電影電視総局）、2013年4月に国家報道・出版・ラジオ・映画・テレビ総局（原語：国家新聞出版广电総局）が当該領域を所管していた。本稿では、い

ずれの時期にも共通して用いられている「広電総局」という略称を採用する。

- 35) 原語：「中国広播電視播音員主持人職業道德准則」（「広電総局關於印發『中国広播電視編輯記者職業道德准則』和『中国広播電視播音員主持人職業道德准則』的通知」（『中国広播電視年鑑』2005年版：521-524））。
- 36) 原語：「広電総局關於批轉中国広播電視協會『中国広播電視播音員主持人自律公約』的通知」。
- 37) 原語：「關於規範広播電視節目用語推廣普及普通話的通知」。
- 38) 原語：「広電総局關於加強制境外広播電視節目播出管理的通知」。
- 39) 中華人民共和國中央人民政府ウェブサイト「広電総局公布繼續有效部門規章和規範性文件目錄」（http://www.gov.cn/gzdt/2010-11/18/content_1747920.htm）（最終閲覧2021年2月21日）。
- 40) 浙江省では、「方言番組管理の更なる強化に関する通知」第6項が「大陸外から輸入されたラジオ・テレビ番組の吹替版放送の管理に関する通知」に対応した規定となっており、行政許可に係る条件となっている。

参考文献

日本語

- 小田格（2016a）「中華人民共和國福建省南部における閩南語テレビ放送について——対台湾政策下における特例措置」『言語政策』第12号
- 小田格（2016b）「中華人民共和國浙江省における方言番組と政策変容：新旧の関係通知をめぐって」『中国研究月報』第70巻第8号
- 小田格（2017a）「中華人民共和國江蘇省における方言番組とその規制：関係通知の策定背景及び運用実態を中心に」『中国研究月報』第71巻第2号
- 小田格（2017b）「中華人民共和國福建省東部における閩東語テレビ放送について：方言放送専門チャンネルの開設をめぐって」『中国研究月報』第71巻第6号
- 小田格（2017c）「言語政策と評価に関する一考察—中華人民共和國の『都市における言語・文字に関する事業の評価』制度を事例として—」『人文研紀要』第86号
- 小田格（2018a）「中華人民共和國広東省珠江デルタにおける広東語テレビ放送をめぐる政策—方言放送特区の成立、経過及び展望—」『社会システム研究』第21号
- 小田格（2018b）「中華人民共和國における方言番組をめぐる政策の変遷」『中国研究月報』第72巻第7号
- 小田格（2018c）「中華人民共和國上海市における上海語テレビ放送と言語政策—

- ポスト標準中国語普及時代の方言放送の行方—『人文研紀要』第89号
小田格 (2019) 「中華人民共和國における方言番組に対する規制通知等再考」『人文研紀要』第92号
小田格 (2020) 「ユネスコ「岳麓宣言」と「方言」に関する一考察—中華人民共和國の事例を手掛かりとして—」『人文研紀要』第95号
朱新建 (1998) 「中国語湘方言の子音に関する一考察—湘潭語と長沙語を中心に」『愛知学院大学教養部紀要』第45巻第3号
辻伸久 (1979) 「湖南諸方言の分類と分布」『中国語学』第226号
山田賢一 (2006) 「中国の“改革派”放送メディア—湖南ラジオ映画テレビ集団の取組み」『放送研究と調査』第56巻第3号
ラムゼイ, S. R. 著 (高田時雄他訳) (1990) 『中国の諸言語—歴史と現況—』大修館書店

中国語

- [論文, 書籍等]
阿雲 (2007) 「瞧這“一家子”」『新聞天地』2007年第3期
馮伝書 (2019) 『湖南普通話推广 歴史、現状与対策研究』湖南教育出版社
葛佳寧・鄧歆 (2020) 「從『拐角巷七号』看衡陽本土電視劇的發展現狀」『西部廣播電視』2020年第17期
何共淮 (1992) 『視聽探微』中国廣播電視出版社
賀朝暉 (2009) 「從『越策越開心』看電視節目的本土化」『芸海』2009年第1期
侯明廷・陳小明・劉婷 (2006) 「2007年值得關注的四大節目之方言節目」『大市場・廣告導報』2006年第12期
湖南省基礎教育改革与發展研究組・湖南省語委普通話培訓測試中心 (2009) 『湖南語言文字工作改革与發展三十年』(湖南語言文字規範化叢書) 非売品
湖南省教材教学研究室 (1979) 『推广普通話資料選編』(内部資料) 非売品
湖南省語言文字工作委员会弁公室・湖南省語委普通話培訓測試中心編 (2003) 『城市語言文字評估実用手冊』湖南科学技術出版社
湖南省語言文字工作委员会弁公室・湖南省語委普通話培訓測試中心編 (2009) 『湖南省語言文字培訓測試实践与理論』湖南大学出版社
湖南省“中国語言文字使用情况調查”弁公室・湖南省語言文字工作委员会弁公室 (2002) 『“中国語言文字使用情况調查”湖南省調查研究文集』湖南化学技術出版社
姜舒文 (2009) 「方言類電視節目存在的合理性及其主持風格探析—以湖南衛視方言娛樂節目『越策越開心』為例」『電影文学』2009年第20期
蔣祖堯 (2009) 「对永州市新農村公共文化建設的幾点思考」『湖南科技学院学报』

第30卷第11期

- 經世出版編 (2009)『一家老小向前衝 漫画第一季』湖南人民出版社
- 李勝彬 (2007)「談接受美學思想對湖南方言室內電視劇的影響」『新學術』2007年第6期
- 李曉婷 (2005)「“策神”汪涵 我是真正“無宗限”」『南方人物周刊』2005年第17期
- 李宣·懷玉·王晗 (2005)『笑將楊五六』湖南人民出版社
- 李中惠 (2005)「湖南電視：后娛樂主義」『中國商界』2005年第3期
- 劉珍瑜 (1999)「燕子聲聲春如海——湖南經濟電視台『還珠格格』劇組赴台交流」『台聲』1998年第8期
- 羅昕如 (2001)『湖南方言與地域文化研究』湖南師範大學出版社
- 羅昕如等 (2019)『湖南文藝創作中的方言現象研究』湖南師範大學出版社
- 歐陽常林 (1999)「樹頻道品牌 創媒體新路」『當代電視』1999年第11期
- 歐陽杰群 (2009)「從『越策越開心』到『天天向上』看電視節目品牌延伸策略」『電視研究』2009年第10期
- 任理德·周忠 (2002)「魏文彬：讓傳媒巨艦揚帆遠航」『傳媒』2002年第4期
- 譚曉寧 (2009)「從『一家老小向前衝』看湖南經視自拍方言情景劇的光盛」『湘潭師範學院學報(社會科學版)』2009年第4期
- 湯集安 (2011)「從湖南广电看頻道制改革對電視產業發展的作用」『電視研究』2011年第3期
- 唐滌非 (1999)「來自“真情對碰”的報道」『青年記者』1999年第6期
- 魏颯滌 (2017)「貼近獲取力量——城市台節目的本土化編排與包裝探索」『新聞世界』2017年第9期
- 武漢大學中國語情監測與研究中心 (2013a)「華中四省方言電視節目抽樣調查」『中國語情』2013年第2期
- 武漢大學中國語情監測與研究中心 (2013b)「西南四省市方言電視節目抽樣調查」『中國語情』2013年第2期
- 湘萱 (2000)「敢立潮頭唱大風——湖南經視改革弁台啓示錄」『當代電視』2000年第2期
- 新聞天地編輯部 (2001)「下篇：打造“航母”的背后」『新聞天地』2001年第1期
- 楊喜卿·任崇蓉 (2006)「電視情景劇的本土化與全球化——以『一家老小向前衝』為例」『新聞前哨』2006年第12期
- 楊旭明 (2017)『湖南電視對長沙城市形象的建構研究』中國社會科學出版社
- 雍旭宇 (2008)「在推廣普通話大環境下看湘方言的現狀」『消費導刊』2008年第21期
- 章穎·許娟 (2015)「淺析方言新聞節目的敘事策劃技巧」『新聞研究導刊』2015年

第6巻第21期

- 鄭里編 (2006) 『有園論壇 湖南經濟電視台論文集』 湖南人民出版社
- 中国文字改革委員会編印 (1964) 『關於推广普通話的文件匯編』 (内部文書) 非売品
- 周紫燕 (2007) 「長沙地区広播電視方言節目受眾語言態度研究」暨南大学修士論文
- 周紫燕 (2009) 「長沙地区電視方言節目受眾語言態度調査」『語文学刊』2009年第6期
- 鄒当栄 (2000) 『故事酒吧』 湖南文芸出版社
〔年鑑, 地方志等〕
- 常德市地方志編纂委員会・常德市広播電視台編 (2013) 『常德市広播電視志 (1988～2010)』 方志出版社
- 常德市広播電視局編 (1992) 『常德地区志 広播電視志』 中国科学技術出版社
- 常德市人民政府地方志办公室編 (2010) 『常德年鑑』 (2009年版) 方志出版社
- 衡陽年鑑編輯委員会編 (2011) 『衡陽年鑑』 (2011年版) 雲南人民出版社
- 衡陽市広播電視志編纂委員会編 (2014) 『衡陽市広播電視志 (1949-2009)』 方志出版社
- 『湖南広播電視年鑑』編輯委員会編 (1987-2019) 『湖南広播電視年鑑』 (1986～2018年版), 湖南人民出版社
- 湖南年鑑編輯委員会編 (2002) 『湖南年鑑』 (2001年版) 湖南年鑑社
- 湖南省地方志編纂委員会編 (1997) 『湖南省志 第二十卷 広播電視志』 湖南人民出版社
- 湖南省岳陽市広播電視志編纂委員会編 (1999) 『岳陽市広播電視志』 (湖南省岳陽市地方志叢書) 非売品 (湘岳文准字 [1996] 03号)
- 万里主編 (2011) 『湖湘文化辞典 (五)』 湖南人民出版社 (電子版を利用)
- 『湘潭電視台卷』編委会編 (1997) 『当代中国広播電視台百卷叢書 湘潭電視台卷』 中国広播電視出版社
- 湘潭県広播電視局編 (2004) 『湘潭県広播電視志 (1932～2003)』 (湘潭県地方志系列叢書) 非売品
- 岳陽年鑑編輯委員会編 (2006) 『岳陽年鑑』 (2006年版) 方志出版社
- 中共株洲市委党史办公室・株洲市広播電影電視局編 (2010) 『株洲伝媒史話——株洲広播電視發展史』 (中共株洲社会主義時期歴史資料叢書) 非売品
- 中国広播電視年鑑編輯委員会編 (1987-2019) 『中国広播電視年鑑』 (1986～2018年版) 北京広播電視出版社
- 〔新聞記事〕
- 長沙晚報 (1999年10月23日) 「方言『還珠格格』評論」
- 長沙晚報 (2015年1月8日) 「電視情景劇『浣龍河』10日開播 『一家老小』原班

人馬出演」

華西都市報（2006年3月22日）「湖南話版『武林外伝』反響不佳 四川放棄方言版」

三湘都市報（2021年2月7日）「情景劇『君風笑伝』定档，實力派加盟爆笑賀歲」

邵陽城市報（2020年8月14日）「『莎陀陀講新聞』」

益陽日報（2019年9月2日）「市市場監督管理局 自編情景劇 唱好“普法”戲」

岳陽晚報（2015年7月20日）「『舌戰 街河口全魚樓』新聞發布會舉行 系岳陽首部方言輕喜劇」

瀟湘晨報（2006年3月17日）「『武林外伝』配上湖南方言 汪涵笑談配音趣事」

瀟湘晨報（2020年8月27日）「湖南本土特色情景劇『君風笑伝』開機」

〔映像ソフト〕

「德哥外伝」（VCD）瀟湘電影制片廠音像出版社（ISRC CN-F09-02-0046-0/V·J9）

「楊五六笑伝（一）『故事酒吧』湖南方言喜劇故事精選1-2」（VCD）湖南電視音像出版社（ISRC CN-F10-99-0001-0/V·J9）

「一家老小向前衝 金裝第1季」（VCD）湖南金蜂音像出版社（ISRC CN-F08-05-329-00/V·J9）

「一笑治百病」（VCD）広州市新時代影音公司（ISRC CN-F21-00-409-00/V·J8）